

望ましい保育の展開と保護者支援 －一人一人の幼児の育ちを保障する指導を目指して－

坪井 龍彦

要旨：入園時より問題行動の多かったA児に対して、保護者の願いや幼稚園の要望をすり合わせて行動目標を立てた。1学期が終了した時点で、行動目標の評価を行い、新たな取り組みを行った。一方、教師がA児の保護者の悩みを聞き、在園児の保護者間の調整をし、A児の保護者の孤立も防いだ。本稿では、A児の行動をより良く変えていく過程を中心に報告し、保護者への支援についての考察を行った。

見出し語：行動目標、個別指導プログラム、行動目標の評価、増やしたい行動、減らしたい行動

I. 気になるA児の事例

A児は、4歳児（年中）より本園に入園し、現在は5歳児（年長）である。入園時より、人を叩くなどの問題が絶えなかった。4歳児の担任及び副担任は、対人関係や集中力のなさに問題があるのではないかと感じていた。そこで、A教諭は無視する、B教諭は承認するという役割分担をして対応した。この結果、A児の行動に変化は見られたが、A児は不都合なことがあるとB教諭に訴え、受け入れてもらうことを覚えてしまった。

5歳児になり、行動の調整を目指して、個別指導プログラムをたて、対応した。本稿では、この経過について紹介し、子どもの行動をよりよく変容させていくことが、結果として保護者を支援することになった幼稚園での実践を報告する。

II. 行動目標と個別指導プログラム

A児のように不適切な行動が多い子どもは必ずしも特殊教育を受けているわけではないので、個別教育プログラム（IEP）を作成する必要はないと言われている。しかし、次の教育への移行を考えたとき、教育目標をたて、それに添った具体的な行動目標、手立てを明記し、それがどこまで達せられたかを、評価し、引き継いでいく必要がある。個別指導プログラムは、以下の手順で作成した。

1. 個別指導プログラムの手続きと内容

- ①保護者の願いを十分に聞いた上で短期目標を立てる。
- ②短期目標が長期目標につながるように明記する。
- ③行動目標を文章化しておく
- ④その都度どんな手立てをしたか記録していく。
- ⑤形成的評価で目標を見直すなどして取り組みを進める。

行動調整を目指したプログラムをたてる際には、不適切な行動に注目しがちであるが、本児の増やしたい行動も取り上げることにした。まず、家庭訪問・降園時などの機会に保護者からの悩みや要望を聞いた。また、園での不適切な行動の洗い出しを行った。そして、保護者の要望と園での課題のすりあわせを行い、優先課題を取り上げて対処することとした。大学教官からアドバイスを受け、行動の適切化、新しい行動の生起を探っていくという目標を立て具体的なプログラムを作成することとした。保護者と園ですりあわせたA児の「増やしたい行動」「減らしたい行動」「絶対やめさせたい行動」は表1の通りである。

表1 A児に期待する行動内容

増やしたい行動	減らしたい行動	絶対やめさせたい行動
<ul style="list-style-type: none"> ・人の名前を呼ぶ ・ごめんなさいを言う ・ありがとうと言う ・椅子に座る ・友達に貸したり譲ったりする 	<ul style="list-style-type: none"> ・バカ野郎と言う ・すぐ横になって寝る ・指しやぶりをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・人を叩く ・物を投げる

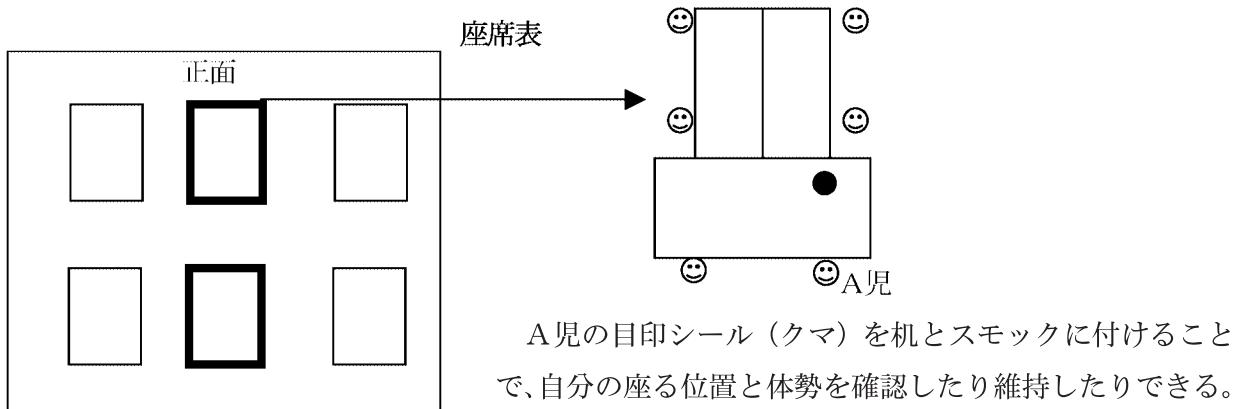
2. 行動目標

表1に示したA児の「増やしたい行動」を行動目標にして、「認知能力」「表出行動」「不適切行動」として分け、さらに園での課題である「運動能力」の面での行動目標も設定した。

1. 認知能力 教育目標：仲間の顔を見て、名前が言えるようになる。 行動目標：毎日、欠席者の写真カードをボードに貼り、名前を言う。 1学期中にクラスの半数の名前を覚えて言う。	2. 表出行動（1） 教育目標：A児が叫いたり、大きな声を出などした後、謝罪できるようになる。 行動目標：周囲に迷惑をかけたとき、自分が何をしたのかを言い、相手に対して「ごめんなさい」を言う。
3. 表出行動（2） 教育目標：感謝の気持ちを表すことができるようになる。 行動目標：仲間から水遊びホースを貸してもらったら「ありがとう」を言う。	4. 不適切行動 教育目標：一定時間着席行動をとれるようになる。 行動目標：朝の会の10分間椅子に座る。 教師の許可なく離席しない。 (席を離れる時は手を挙げる)
5. 運動能力（1） 教育目標：姿勢保持のための持久力がつくようになる。 行動目標： ①鉄棒にぶら下がり5秒停止する。 ②鉄棒にお腹を主軸として5秒静止する事ができる。	6. 運動能力（2） 教育目標：仲間と楽しむためにボールで遊べるようになる。 行動目標：ゴールに向かってボールを蹴ることができる。 5回中4回はゴールに確実にはいるようにする。

3. 不適切行動目標の対応例

「不適切行動」では、一定時間着席行動をとれるようになるという教育目標をたて、朝の会の10分間は、椅子に座っている、教師の許可なく離席しない、という行動目標をたてた。



この指導では、A児だけ机にシールを貼らずに、全員の机に目印シールを貼るように配慮した。また、A児だけ、なぜスマックにシールを貼っているのかという園児からの問い合わせに対して「暑くて脱いだときすぐにわかるからだよ」または、「彼がシールが大好きだからだよ」と説明するようにした。

テラスや廊下から刺激が入ってくると、いつも落ち着かなくなり離席したり、姿勢が崩れて聞く姿勢がとれなかったりするため、中央の席にし、正面が見やすい位置とした。

朝の会では、欠席者を確認するために、欠席した幼児の写真をボードにはるという動きのある活動を行い、さらに友達の名前を書くようにした。

4. 絶対やめさせたい行動目標の対応例

表1に示したようにA児に「絶対やめさせたい行動」として、「人を叩く」という行動がある。A児がこの行動を起こすときの状況は、以下のような場面であった。

A児が押し車を独占して、仲間に貸さない状況があった。B児に何度も貸すように言われたA児が、B児を押してげんこつで叩いてしまい、B児は泣いた。

このときの対応として、以下の図のように、A児が押し車で遊ぶこと自体は悪い行為ではないが、押し車を独占して、仲間に貸さないことは、間違っていることに気付かせるようにした。それとともに、どうしたら貸すことができるようになるのかを確認した。

また、“だめ”の時には、腕で×印をつくり、視覚からも情報も入れるようにした。だめばかりでは、A児の楽しい場面がなくなってしまうため、“だめ”があれば“良い”もあることを示し、A児が納得の行くように配慮した。

この具体的な対応は、次の図のようなやりとりであった。

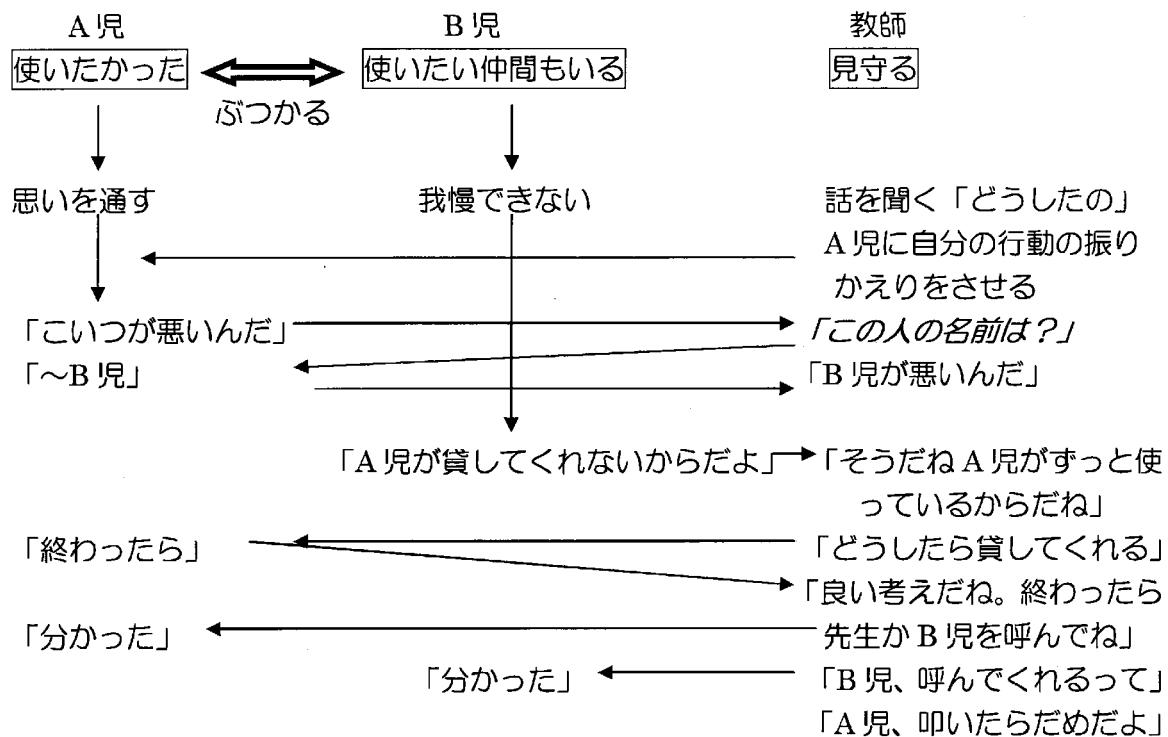


図 A児が「人を叩く」行動をしないための指導例

5. 5月～8月までの行動目標の評価（教師・保護者）

「2. 行動目標」で示した1から6までの行動目標に対する教師と保護者の評価、及び今後の対応は、以下のようである。

①認知能力

教師	保護者
A児は36名の友だち名前を完全に覚えた。フラッシュカードのように次々に写真を見せると、2学期の初めには、友達の名前を言うことができた。	母親は、最近幼稚園であったことを断片的ではあるが話したり、話の内容にお友達の名前がでてきたりするようになったと話す。園で誰と遊んできたのかが、おぼろげながらわかるので嬉しいと言っている。
今後の対応	
9月からはボードには文字のみで、欠席者の名前を書くようにする。 アイウエオ表を読ませる（不定期）	

②表出行動(1)

自分が間違った行動や不適切な行動をとったとき、「ごめんなさい」と言うことができるようになってきた。しかし、相手を叩いてしまったとき、近くに教師が見ていて視線が合えば、「ごめんなさい」は言える。その意味では、指示や命令が出て、それを受けて表出していることが多い。

母親は、語彙も増え、状況にあった言葉を話すようになってきたという。ごめんなさいは、「何て言うの」と尋ねると、言うことができるようになっている。以前は「何が悪い」と言わんばかりに、逆上することがしばしばあった。



状況を自分で考え自分から言えればいいが、出て来ないときは「何て言うの」と考えさせるようにして、表出させる。

③表出行動(2)

「ありがとう」「いいよ」「貸して」など、感謝の気持ちや相手を受け入れる気持ちを言葉で表出することができるようになった。友達ともやりとりが活発になり、言葉でのやりとりが成立してきた。何よりも、「A児、～貸して」と友達が言うと、特に固執していない物に対しては「いいよ」と、素直に表出して渡すことができるようになった。

母親は、「ありがとう」は、家でも妹や母親に対してもよく言うようになった。また、園に登園し玄関にはいると、自分から「おはよう」と声をかけるようになった。表情も以前は目もつり上がっていたが、柔らかい表情に変わった。



言葉や行動のモデルを教師や大人が作り、どんな言葉が相手に受け入れられ気持ちが良くなるか、どんな行動したら相手に誉められるかを経験させる。

④不適切行動

朝の会の10分間、人の話を聞き、離席しないで待てる。
発言の際は、手を上げてから先生が「はい」と言ったら発言できるルールを作った。他の幼児もそのルールに従い、学級として位置付いた。朝の会に出たくないと言ったのは2回あり、手を上げて発言したので認めたところ廊下で遊んでいた。
また、朝食は登園中の車の中で摂ることが多かつたので、母親に協力してもらい、朝食は家の食卓で椅子に座って食べるよう習慣付けていただいた。

母親は、授業参観の時、朝の会で、先生の顔を見て、話を聞いている様子を見て驚いた。
勝手な発言をしないで聞いていることに成長を感じた。
人を叩くという行動も減った。

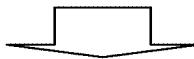


おもしろくないことに対して叩く、暴言を吐くという表現方法から、言葉でのコミュニケーションが成立しつつある。まだ、手が出ることがある。「どうしたの」と大人が言うと行動を止められるようになってきているので、すぐに怒らないで、自分の行動をフィードバックできる対応を継続していく。

⑤運動能力 (1)

鉄棒での静止はまだ不安定である。まっすぐ歩いたり、走ったりすることができない。常に刺激を受信して目、頭、四肢が動いている様子が見られ、立位姿勢や歩きのフォームがあまり良くない。運動会のリレーの際、コーナーに数本置かれたコーンを見てスラロームするなど刺激に反応してしまう。一応目標は達成できたものの、自分から興味を持って取り組むことはない。支持面の小さい鉄棒に体を置いて運動をするのに恐怖感がある。前回りはまだ、難しいようである。目標の設定が誤りであった。

両親は昨年の運動会に比べると
①皆と一緒に並んでいた、
②ラジオ体操を最後まで間違わないで行っていた、
③仲間とのトラブルがなかった、
④走り方は悪いが最後まで走りきったなどと評価は高かった。
⑤鉄棒ができるようになったと言って喜んでいた。



一つ一つ自分の動きを意識して行動化できるように細分化して指導していくのか、全体としてまとまりのある行動ができるように細かいところは目をつぶるのか迷っているところである。

⑥運動能力 (2)

ボールを蹴ることに対するA児の興味が薄いので無理に練習に取り組ませることは避けた。サッカーゲームの形で行ったが、途中で走ることを止めてしまうなど、A児がボールに触る機会は殆どなくゲームに対する興味関心も遠のいてしまった。

動きのぎこちなさやボールと自分の位置関係がとれず、蹴っても思うところに蹴ることができていないという。しかし、ゲームの中では良い表情をして、参加していたと思う。



ボール蹴りは目標が高かったようですが、ゲーム感覚で遊べる内容のものは適しているようである。

グランドホッケーを採用し、手と器具、器具とボールとの関係でA児が自分の体や腕をコントロールして遊ぶことができるか、すぐに投げ出さないで持続して遊べるかを総合的に見ていく必要があると考える。

6. 新たな取り組み 9月 =指しやぶりの軽減と就学の選択=

9月になり保護者から指しやぶりをやめさせたいという相談を持ちかけられた。

A児は、入園してきた時から、當時指しやぶりをしていた。母親は指を吸うことでA児が情緒安定を保ちリラックスできるものと捉えていた。人に対して危害を加えるものではなかったので、園でも早急な対応をせずに過ごしてきていて、「癖」になっている状況であった。

しかし、回りの子どもが「赤ちゃんみたい」と年少・年長の幼児が話しているのを母親が聞いて、止めさせなければと思ったようである。どうしたらしいものかと相談を投げかけられた。

1) 指しゃぶりの問題

指しゃぶりをすることで友達の評価（社会的評価）が低下し、A児が赤ちゃん、幼いというイメージで塗りつぶされてしまう可能性があるため、どんな時間帯に、どの場所で、何をしているときに（どんな状態の時）に多く見られるのか、について園にいるときと家庭に帰ってからの場面で観察することにした。観察期間は1週間とし、その結果をみて対応を考えることとした。

	家 庭	園
時間帯	特に決まってないが寝るときは決まって行っている	保育の後半
場所	特にない	どこでも
どんな状態	遊んでいるときも行っている 就寝前	活動に集中しているときは少ないが、何か考えるときや「疲れた」と訴えてきた後
回数/day	数え切れない	10回前後
どちらの手	主に右手親指。しかし、右手がふさがっていたら左手でも	ほとんどが右手親指

このように、ある特定時間帯で行っているのは就寝前で、その他は特にこのときはという場所や時間帯はない。したがってすでに「癖」として習慣化されているようである。

①対応方法

A児が指をしゃぶるという行為を消去していくためには、指を無意識に見たら「はっとする」「指は口に入れないで、下に下げる」という意識化と行動化を同時並行で行っていくように、A児の爪にシールを貼ることにした。

シールを見ることで、口には入れないという約束を実行できるように、爪から剥がれたら教師が付けるようにした。家庭でもシールを渡し貼ってもらうようした。

②友達の反応

「ねーせんせい、Aはどうして爪にシール貼っているの」教師「Aはシールが好きでしょ。○○ちゃんもお母さんのマニキュアいたずらすらして付けることあるでしょ。同じよ」と言い、教師の方から周りの幼児達に遊び感覚で、付けていることを説明した。

③評価（教師・保護者）

園では1週間で指しゃぶりはほとんど見られなくなった。ただ、保育の後半指しゃぶりが見られたが、指を十分意識することができるようになった。

10月末では、保育中はほとんど指を吸うことはなくなった。

家庭でも、指はかなり意識して、口の中に入れないようにとしている姿が見られている。この1ヶ月で、回数的には激減した。口に入れようとして目が合うだけで自分で止めようとする。しかし、就寝時にはまだみられている。

今はシールを使わずに見ているところで口に入れそうにならたら、アイコンタクトでコントロールできるまでになった。また、自分が今日したいことを発表させ、それを実行できるように配慮し、自分が取り組むスケジュールを自分で作ることが出来るようにした。

2) 就学について

保護者は、就学についても心配をしている。現在、就学相談を行っているが、A児が行きたい学校の希望があるならば、そこも含めて先ず家庭内で検討することが大切であると伝えている。

12月までに何度か大学の教官及び保護者・教諭との話し合いをもって、結論を出していくようにならうと考えている。

III. 考 察

不適切な行動を見せる幼児の場合、保護者の実態認識と教師の認識の違いをどのようにすりあわせて埋めていくかが重要なポイントとなってくる。A児の場合でも、見方によれば、単に自己主張が強く、人の話が聞けない自己中心的な幼児と考えてもおかしくはないと思う。もしも他の幼児と違うとしたら、どこがどのように違っているのかを客観的指標で表していくスキルを教師自身が身につけていなければ、その違いを見落としてしまう可能性がある。幼児期は発達の様相が混沌としている時期であり、すぐに軽度発達障害という判断をせず、慎重に対応していくことは言うまでもない。

診断名を知ることより、幼児の行動を分析し、その幼児にあった生活のしやすさを考えていくことが重要である。診断名がついたからといって幼児の行動が変わるわけではない。的確な実態把握をした上で、その実態を教師がどう捉え、分析できるかが一番大切な入り口である。そしてどのような対応をし、どのような指導方法を考えていったらよいのかを、大学教官と考え実践していくことが、今我々にできる最善策であると思っている。

今回のケースでは、幼児の行動変容に焦点を当て、大学教官との連携のもとに取り組みを進めてきた。診断名のない幼児に教師の独りよがりで指導を進めていくのは、危険性が高い。そこで大学の障害臨床講座や幼児教育講座の教官と連絡会議をもち、実際的な保育及びケースについて話し合えるサポート体制を作っていくことにした。こうした連携をもつことは、附属幼稚園教官ならびに幼児にとって意味があるだけでなく、保護者にとっても有益であると考えている。

さらに、幼稚園教諭は、幼児の育ちと共に保護者支援も同時に進めていかなければならない。例えば、保護者が幼児の発達過程の歪みや凹凸を個性や持ち味として捉え、幼児の不適切な行動を力強くねじ伏せてしまうといった状況を異なった視点からとらえなおすように促すこと等である。

また、幼稚園における保護者同士のかかわりの中で摩擦が生じることもある。子どもが仲間とトラブルを起こし、保護者間で謝る・謝らない、遊ばせる・遊ばせないなどの不協和音が飛び交い、保護者が孤立してしまう状況が起こることもある。問題が起きた時点ですぐに保護者と連絡をとることは大切である。定期的に保護者の悩みに耳を傾ける機会を設け、その悩みに共感したり、共有したりして解決策と一緒に考えていくことも大切である。教師は親身に話を聞いてくれる人だという親近感や信頼感を保護者がもてるよう努めなければならない。保護者が子育て不安からバーンアウトしてからでは遅く、それ以前にメンタルケアをしていくことも教師の重要な役割であろう。

気になる幼児の教育的対応を考える時、園の教師間だけの共通理解にとどまらず、教師支援として大学教官とのケース会議を通して論議することが有効であることが今回の取り組みで実感できた。今後も幼児が生活しやすい環境を構築していくような保育実践のあり方やシステム作りを検討していきたい。

幼児期にどのような教育や養育がなされてきたかで、その後の幼児の育ちに影響を及ぼすことは間違いない。その意味で、大学との連携に支えられた幼稚園の保育実践と、家庭における養育への果たす役割は大きい。そして幼児のより良い方向への変容・成長が何よりも力強い保護者支援に結び付いていくものであると考えている。

